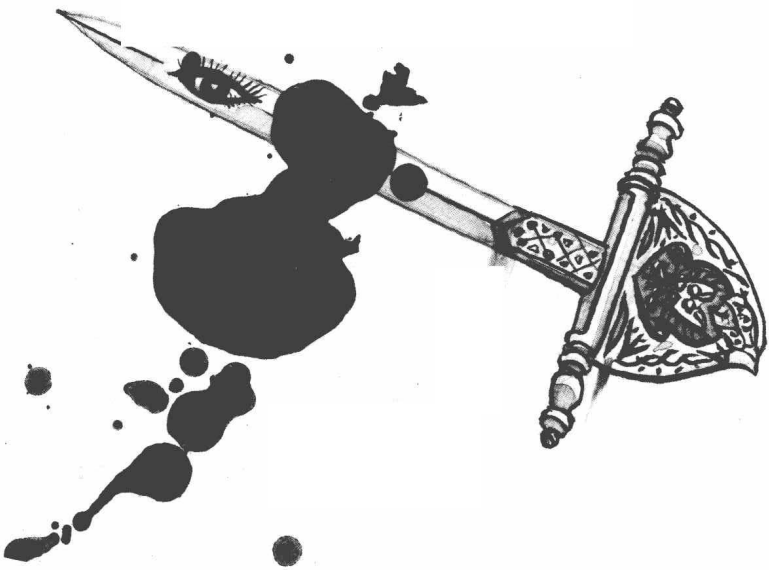
五島・福江行

石沢英太郎

五島・福江行

石沢英太郎



五島・福江行

一九七七年八月一〇日　初版印刷
一九七七年八月二五日　初版発行

定　価　九八〇円

著　者　石沢英太郎

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部　二三〇―六三六一
販売部　二三〇―六一七一

印刷所　大文堂印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします

© 1977 E. ISHIZAWA Printed in Japan
0093-772102-3041

石沢英太郎作品集・目次

緑の炎　5
0123　51
五島・福江行　87
求菩提行　121
血・その系譜　169
貨泉　209
男色　263
不思議に生命ながらえて　291

装画　園田静香
装幀　アトリエ・バウ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五島・福江行

緑の炎

1

多彩な緑の撒布だった。

おおげさにいうと、アサヒ原色写真株式会社は、全社が、緑に浸されていた。

緑は、五階のレタッチ課から始まる。

ここでは、十五名のレタッチマンが、緑色の人工彩色にとり組んでいた。机上の絵具も、壁に張られている色票も、すべて緑色以外のものはない。

鶯色、憲法色、青朽葉色、若芽色、萌黄色、松葉色、常磐色、鶸色、海松色、草色……緑に関してのありとあらゆる色が、レタッチマンの手から創りだされていた。

この緑の原稿は、四階の分解室に流れてゆく。この会社自慢の、上から下へ直線的に配置した仕事の流れだった。分解が終ったセパーとポジは三階のカメラ室にまわる。緑はここで、五色に分れた。カメラに撮られた五色のフィルムは二階の焼付部に流れ、もとの緑色に合成されてゆく。レタッチマンの手で生れた緑色は、この焼付室でそのまま、鮮かに、校正刷りに再現されていた。

一階の校正室では、二人の男がひっきりなしに届けられる、緑色の校正刷りに、眼をとおしていた。ひとりは製版部長の田辺浩であり、もうひとりは、K大農学部教授の佐山尚二であった。

校正写真は、羊歯図版である。

世界で初めてといわれる緑一色の『原色羊歯図鑑』作成の先頭に、田辺部長と佐山教授が立っていた。

原色写真業界の白眉といわれている、このアサヒ原色写真株式会社が、利が薄いこの仕事に十五名のレタッチマンを投入するという、営利会社にしては、思いきった決断に踏みきるまでには、当然いろいろの紆余曲折があった。

アサヒ原色写真の客筋はよい。大手の印刷会社は、すべて獲得している。

百科事典で、このところ大いに当てた図鑑社の図鑑シリーズも、アサヒにとって無視できぬ安定性のある仕事だった。図鑑は販路が一定しているので、発行部数が少ない。しかし確実である。巧味のある仕事ではないが、決して損はいかない受注である。

だから、そのシリーズの第三十一号として、『羊歯図鑑』の発注があったとき、幹部の間に楽観ムードがあった。

「こんどは儲けさせてもらわないとね」

企画会議で、経理次長の杉村良雄がそういったとき、一同の間に微笑が流れたものである。その前の『岩石図鑑』で多彩な色の配合で手間をとったので、緑一色という単純なこの『羊歯図鑑』の受注は、魅力だった。図鑑社との契約は年間五冊のコミになっている。

「まあね」

朝比奈社長の頬もゆるんでいた。

『二色印刷でもスムんじゃないか』

との声も出たくらいである。

しかし、これが認識不足だとわかったのは、最初のテスト印刷の打合せ会で、佐山教授と、田辺部長と顔を合わせたときである。杉村経理次長も立ち会った。

教授は一枚の標本をテーブルの上に置いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「平凡な羊歯ですがね。『リョウメンシダ』というんです」
一べつした田辺は、意外に感じた。羊歯の色は褐色だった。もう多年の歳月を経て、色彩はすでに失われていた。
「色が変化してますね」
と田辺がいった。
「ええ、この製版用の羊歯標本は、完全なのを選ばなければならないんです。葉片ひとつの切れこみが浅いか深いかで、変種や別種と間違われます。葉柄や胞子や鱗片が正しいものでなければならない。だから、どうしても古い標本になりますね」
羊歯の知識にうとい、田辺や杉村は、教授のいう植物学の用語こそわからなかったが、要するに、もう色彩をとどめていないこの標本から、実際に生育している色を出さなければならないことは理解した。
「色票で決めましょう」
田辺部長は傍の色票ファイルを手にとった。この色票は田辺の自慢のものだった。マンセル表色系とオストワルド表色系から、彼自身が創意を凝らし、印刷に適するように作ったものである。色別に薬品の配合が記載されており、慣用色名もつけられている。緑色だけでも七十種を越えている。
「これは?」
と田辺は、ひとつの色を示した。
「濃過ぎますね」
「ではこれは?」
「薄いな」
「じゃあ、このへんですか」

「どうも合いませんね」
「どうでしょう、これは……」
「違う」
「この8—19・5と8—19・8との間となりますと、この色になりますが……」
「やはり違うね。第一、この『リョウメンシダ』のもっとも強い特徴の艶がない」
田辺はぐっとつまった。
『色』は言葉では、表わせない。教授の頭にある色は、他人には窺われないのだ。初歩的なつまずきが、ここにはあった。
とにかく参考までに、篤志家があつめている房総の羊歯園を見にいくことになった。
あとで考えると、このとき、田辺製版部長が羊歯と対決した衝動が、アサヒ原色写真を緑で覆ったといっていいだろう。

田辺浩は小一時間もその羊歯園に立っていた。
雨に洗われて、ぐんと鮮かさを増した、羊歯の群落である。色の世界に、十三年ももまれた田辺にとっても、この緑の量感は驚きだった。いや十三年も、色彩へ挑んできた田辺だったからこそ、この緑の多彩さに息を呑んだのかもしれない。
それはかならずしも緑一色ではなかった。種別に緑が微細に変化しているのだ。ひとつひとつの羊歯が、その羊歯固有の緑を主張しているのだ。そしてそれはまた、生きた緑だった。
旺んな生命感があり、艶があり、量感があった。
『この多様な色を、原色写真に……』
不可能に近いことだと田辺は思った。技術的制約の上に、期間的制約がある。採録される図版は五

百種、そのうち、原色撮影可能の羊歯は百種、あとは、中国、九州、果ては南の屋久島まで足を伸ばさないと、その羊歯の生の色は見られないという。この羊歯園の移植された羊歯すら、生息現地での色彩が、もう微妙に変化していると聞いた。

眼の前にある羊歯の群生は、田辺にとって、『緑色の壁』だった。

田辺が、ぐっと闘志を呼び起したのは、そのときであった。壁にぶつかるとなにくそと感じるのが、田辺の性格である。いままで色彩へのチャレンジによって、色彩を克服してきた自負が田辺にあった。

〈よし、この色を出してやろう〉

緑色からの挑戦を、四つに組んで受ける気持に、田辺はなっていた。

「どうですか？　この色は出ますか？」

傍の佐山教授が心配そうに訊いた。

「出ます」

キッパリと田辺は答えた。

この企画に、もっとも強硬に反対したのは、むしろ、重役連より、杉村経理次長だった。

「道楽で商売をやっているんじゃないですよ。こんな儲けの少ない仕事に、レタッチマンを十五人も投入し、しかもそれが、口頭色彩説明による、モノクロームからの人工分析着色製版ときている。非常識きわまります」

この杉村次長の否定的な意見に対し、田辺の強い主張は、幹部たちの心を微妙にゆすったようである。

「アサヒ原色写真株式会社が、ここまで発展してきたのは、先進的な技術導入と、いつも業界で最高の製品を出すという良心と、つねに色彩に挑んできた意欲だと、ぼくは思っています。冒険をおかしても、採算度を無視しても、ながい眼でみれば、効果があると、ぼくは信じています」

幹部も田辺も杉村も、創業時代から、ともに苦労してきた仲である。創業時代のひたむきな闘志は、朝比奈社長の、坂井専務の、鈴木常務の心の中に残っている。田辺の主張はよくわかった。それに田辺は、次期総会で、常務取締役へ昇進が内定している、アサヒの至宝的存在だった。この仕事が済むとヨーロッパへ業界視察旅行も決定していた。田辺の主張を無視できなかったというより、田辺の熱意が押しきったといっていいだろう。

こうして『羊歯図鑑』の製版が決った。

後日、朝比奈社長が、

「日本のフォトプロセス製版オフセット印刷界では、古今未曾有のことだったと確信している」

と自賛し、業界もこれを認めた仕事は、田辺を先頭にしてスタートを切った。

『緑色への挑戦』

田辺好みのスローガンが壁に貼られた。目標を明確にし、従業員をその目標に盛りたててゆく雰囲気づくりには、田辺は妙を得ていた。従業員は、田辺の熱情にまきこまれ、また自分自身、この緑への挑戦に闘志を感じ始めてきた。アサヒ社内が緑色に燃えあがってゆくようだった。

このムードを伝えるには、レタッチマンや重役の間でかわされた会話の一、二を記せば足りよう。

昼休みの食堂で、ひとりのレタッチマンがしみじみと同僚に話していた。

「このごろ朝の通勤電車でもね、緑色ばかり眼につくんだ。グラマーを見てもさ、そいつが緑色の服を着ていると、その色だけが眼についてね。オッパイもヒップもどこかへとんでいっちゃってさ」

同僚が答えていた。

「おれもそうだが、おれの場合、逆に緑色を見るといらいらしちゃってね。まあグラマーの着ている服の緑色を見るとする。あの緑、出せるかなあとすぐ考えるんだ。出しにくいと感じると、もういらいらしちゃうんだな」

重役室では、朝比奈社長が、坂井専務に話しかけていた。
「道楽が過ぎたようだな。こんな割の合わない仕事に気を入れ過ぎたね。だがね、創業時代に、採算度を無視して、いい色を出すために、のめり込んでいったあのバイタリティを憶い出すね」
坂井専務は、黙って頷いていた。
しかし、重役も、製版部員も、愚痴こそこぼせ、いささかの後悔の色もなかった。
そこには、色を創る気迫と情熱があった。
工程が、三分の二ほど進捗したとき、表紙の写真を撮るため、田辺部長が九州へ出張することに決った。
田辺自身、自分でこの仕事を買ったのは、ちょっとしたわけがある。
表紙は羊歯の生態写真にすることになっていた。図版が静止的な標本だから、表紙は、ゆたかな量感あふれる生態写真でバランスをとろうという発想である。言葉を変えれば、製版部員が全力投球をして作った図版の重みに、優に拮抗する立派な表紙写真でなければならない。
田辺部長がのりだしたのは、完全主義の彼の性格もさることながら、動物の生態写真で、国際賞をとった腕の自信もあった。
その日、田辺の妻、多美子は、九州に立つ夫を東京駅に送った。出立前、銀座のレストランでの、久しぶりの夫婦だけの食事が楽しかった。この四カ月、夫がまともに自宅で夕食をとったのはまれであった。
しかし、これが多美子にとって、生前見ることのできた夫の、最後の姿となった。

2

「次長、社長がお呼びです」
送受器を置いた経理課長が、杉村良雄に告げた。
「なんだろう」
と口の中で呟いて、杉村は席を立った。三階の重役室をノックしてはいると、意外にも、朝比奈社長、坂井専務、鈴木常務が顔を揃えていた。
「なにかご用ですか？」
と杉村は訊いた。
仕事のことにしては、皆の顔に憂いに似た表情が浮んでいる。
「実はね、杉村君。田辺部長がね、福岡で身体の調子を悪くしたらしいんだ」
と社長がいった。
「ほう」
杉村はちょっと驚いた。
「まあ、病気は、偏頭痛と軽い吐き気といった程度の症状なんだが……」
それにしても珍しいと杉村は感じた。
十三年一緒に働いているが、田辺から身体の変調を訴えられた覚えがない。風邪ひとつひかない男だった。無遅刻、無欠勤の記録をもっている。
「ところが……」
と社長が続けた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com